

古英語および古高ドイツ語における 語順変化に関する一考察

池田 光貝

キーワード：古英語，古高ドイツ語，ゲルマン語，語順の変化，主節と従属節

1. はじめに

現代英語の基本語順⁽¹⁾は主節，従属節ともに S^oVX であり，現代ドイツ語では主節（主文）が定動詞第2位であるのに対し，従属節（副文）は定動詞後置となっている⁽²⁾。ゲルマン語は古い時代においては，Curme (1922: 586), Smith (1970: 297) 等に指摘されているように，動詞後置 (SXV) を基本語順としていたと考えられている。多くの研究者によって認められるこの見解は，Robinson (1992: 165) に簡潔にまとめられている。

Most scholars now agree that the neutral position of the verb in Proto-Germanic, and in Indo-European, was in fact final, or, to use a popular typological classification, that these languages were SOV languages ...

時代が下るにつれ，英語においては主節，従属節とも基本語順は SXV から SVX へと変化し，ドイツ語においてはこの語順の変化は従属節には生じず，主節だけに起こったと考えられる。

本稿では，古英語，古高ドイツ語の時代に，ほぼ時期を同じくして成立した文献を対照し，英語とドイツ語における語順のありかたを見ていくことにする⁽³⁾。考察の対象にするのは，古英語では West-Saxon Gospels (以下 WS Gosp と略記)，古高ドイツ語では Tatian で，いずれも福音書の翻訳である。同じ原典⁽⁴⁾からの翻訳を対比することにより，英語とドイツ語における基本語順の変化の過程を見ることが本稿の目的である。

ところで，翻訳文献を統語論の研究材料として用いる場合，原典の言語の影響は無視できない。しかし，語順すべてに原典の影響が認められるわけではない。たとえば，古高ドイツ語では，拙稿 (1993) で見たように，関係節の語順には原典の影響とは考えることのできないある一定の傾向を見出すことができる。以下に見るように，WS Gosp の場合も同様のことがあてはまる。

2. 古英語 WS Gosp の語順

古英語の語順、および英語における語順の史的変化については、古英語文献の統計的研究も含め、数多くの研究がなされている。これらについては、Denison (1993: 27-58) および小野・中尾 (1980: 484-498) に紹介されている。また後者には古英語の語順の傾向がまとめられている(主語、動詞等の主要要素の語順については pp. 490-498 参照)。

WS Gosp の語順もちろん、古英語の語順の一般的な傾向にはほぼ一致している。本稿の目的は、古英語 WS Gosp を古高ドイツ語 Tatian と対比することによって、英語、ドイツ語に生じる語順変化の過程を明らかにするにある。したがって、この節では、古英語一般の語順を検討することは行なわず、特に古高ドイツ語の語順との異同で問題になる点に着目し、WS Gosp の語順の特質を明らかにしたい。

2.1. 主節の語順

(1) 主語と動詞の位置関係

(a) WS Gosp では平叙文においては、文頭に主語が位置し、主語の直後に動詞定形が置かれることが多い。定形第1位はきわめてまれである。

Mīne soēap gehȳraþ mīne stefne, ... (J. 10, 27)

WS Gosp では、定形第1位は疑問詞のない疑問文および命令文・祈願文であるとみなすことができる。下は疑問文の例である。

..., lufast ðū mē swīðor þænne ðās? (J. 21, 15)

(b) 文頭に主語以外の語が置かれる時、X S V(X)の語順となる場合とX V S(X)の語順となる場合があり、どちらの語順があらわれるかは、文頭の語(句)および動詞の種類によって決まる。

a. 文頭に否定辞の ne が置かれる場合はX V S(X)の語順となる。

Ne undergēton hys leorningcnihtas þās þing ærest; ... (J. 12, 16)

nis 等、ne と動詞が融合する場合には、その融合形が文頭に置かれることがある。この場合も、ne + 動詞としてX V S(X)の語順であるとみなすことができる。

...; nis ðīn gewitnes sōð. (J. 8, 13)

b. 文頭に ðā が置かれる場合は通例X V S(X)の語順となる。

Ðā andswarode sēo menigeo and cwæð, ... (J. 7, 20)

Ðā dydon hig aweg þone stān. (J. 11, 41)

c. 文頭に上記 *ne*, *ðā* 以外の語, 句および節が置かれる場合は, 動詞が *bēon* の場合には *XVS(X)* の語順となることが多く, *bēon* 以外の動詞の場合には *XSV(X)* の語順となることが多い。

On mīnes Fæder hūse synt manega eardungstōwa; ... (J. 14, 2)

On ðære tīde sē Hælend behēold his leorningcnihtas, ... (J. 17, 11)

Witodlice Simon Petrus ātēah his swurd, ... (J. 18, 10)

Ðā his cnihtas þæt gehyrdon, hī cōmon ... (Mc. 6, 29)

d. 文頭に対格または与格の代名詞, 名詞 (句) が置かれる場合がある。これは原典で対応の語 (句) が文頭にある場合に限られている。この場合は *XSV(X)* の語順となることが多いが, *XVS(X)* の語順も散見する。

Ðās þing hē sæde on gesamnunge, ... ^(*) (J. 6, 59)

e. 接続詞 *and*, *ac* の後では, これらの語の直後に置かれる語 (句) に応じて a ~ d の語順となる。すなわち *and*, *ac* は, 語順に影響を及ぼさないと考えられる。

And sē Hælend cōm and nam hlaf, ... (J. 21, 13)

Ac ic secge ēow þæt Helias cōm, ... (Mc. 9, 13)

(2) 動詞と, 主語以外の文構成要素の位置関係

(a) 対格または与格の人称代名詞が用いられている場合

この場合は, 人称代名詞が主語と動詞の間に置かれる場合が多い。

Sē Hælend him andswarode and cwæð, ... (J. 10, 32)

Ic hyne can; ... (J. 7, 29)

ただし, 文頭に主語以外の語 (句) があり, *XVSX* の語順となっている場合は, 人称代名詞は主語の後に位置する^(*)。

Ðā andswarode sē sēoca him and cwæp, ... (J. 5, 7)

また, *XVSX* の語順ではない場合も, 斜格の人称代名詞はすべて動詞より前に置かれるわけではなく, 動詞の後に置かれているものもある。WS *Gosp* に見られる用例だけでは, 斜格の人称代名詞が動詞の前に置かれる場合と後に置かれる場合を区別する条件を見出すことはできない。

(b) 対格または与格の人称代名詞が用いられていない場合

この場合は、斜格の代名詞以外の語(句)が動詞より前に置かれるのはきわめてまれで、下の例のように、通例動詞の後ろに置かれている。

Sē Fæder lufað þone Sunu, ... (J. 5, 20)

2.2. 従属節の語順

(1) 主語と動詞の位置関係

(a) WS Gosp の従属節では、関係代名詞が主格の場合を除き、接続詞の直後に動詞が置かれることはない。接続詞と従属節の動詞の間には従属節の主語が置かれる。

Hit ys ēowor gewuna þæt ic forgyfe ēow ānne mann on ēastron; ... (J. 18, 39)

(2) 動詞と、主語以外の文構成要素の位置関係

(a) 対格または与格の人称代名詞が用いられている場合

人称代名詞が主語と動詞の間に置かれる場合が多い。

Dis hig cwædon his fandiende, þæt hig hine wrēhton. (J. 8, 6)

Gif middaneard ēow hatað, witað þæt hē hatede mē ær ēow. (J. 15, 18)

上例の後半部に見られるように、動詞の後に置かれている人称代名詞もあるが、主節に比較すると従属節の方が動詞の前に人称代名詞が置かれる例は多く見られる。また、主節の場合と同様に、斜格の人称代名詞が動詞の前に置かれる場合と後に置かれる場合を区別する条件を見出すことはできない。

(b) 対格または与格の人称代名詞が用いられていない場合

主節の場合に比べると、従属節では、斜格の代名詞以外の語(句)が動詞より前に置かれていることが多い。しかし、従属節内で動詞の前に置かれる割合は代名詞よりは小さくなっている。

Wē gesēoð þæt wē nān þing ne fremiað; ... (J. 12, 19)

3. 古高ドイツ語 Tatian の語順

ここでは、必要に応じて同一箇所 of WS Gosp の訳文を示し、語順の対比を試みたい。

3.1. 主節の語順

(1) 主語と動詞の位置関係

(a) 文頭に主語が置かれている文では、動詞はその直後に位置することが多い。

Einlif iungoron giengun in Galileam in then berg ... (T. 241, 1 / Mt. 28,

16)

(b) 文頭に主語以外の要素が置かれている文が多い。その場合、動詞は文頭要素の直後に位置することが多い。文頭に置かれる語としては *tho* が多く見られるが、下の例のように他の副詞や従属節が先行する場合もこの語順が見られる。

Uuar uuar quidu ih thir, ... (T. 238, 4 / J. 21, 18)

Sōð ic secege þē, ...

Bithiu minnot mih mín fater, ... (T. 133, 14 / J. 10, 17)

For þām Fæder mē lufað, ...⁽⁷⁾

Mittiu sie tho ázun, quad Simone Petre ther heilant: (T. 238, 1 / J. 21, 15)

Ðā hī æton, þā cwæð sē Hælend to Simone Petre, ...

上例からもわかるように、これが WS Gosp と Tatian の主節の語順で最も大きく異なる点である。つまり、WS Gosp では文頭に置かれる要素にかかわらず、その後ろでは、文頭に主語が置かれる時の SV(X) の語順が保たれているのに対し、Tatian の主節では、主語以外の要素が文頭にある場合と主語が文頭にある場合とでは、主語と動詞の相対的位置関係が異なっているのである。

(c) 文頭に動詞定形が位置すること、すなわち定形第1位の例も見られる。また *inti*, *abur* も WS Gosp の *and*, *ac* 同様語順に影響を与えていない。これらの語の直後に動詞が置かれるのは、*inti* / *abur* + 定形第1位の構文とみなすことができる。

Minnota ther heilant Marthun inti ira suester Mariun inti Lazarum. (T. 135, 3 / J. 11, 5)

(2) 動詞と、主語以外の文構成要素の位置関係

(a) 対格または与格の人称代名詞が用いられている場合

主語が動詞より後に置かれている文では、主語が代名詞の場合は、主語代名詞が斜格の人称代名詞に先行する。主語が代名詞以外の場合は、斜格の人称代名詞が主語に先行する。

Tho quad in Simon Petrus: (T. 235, 3 / J. 21, 3)

Tho quadun sie imo: (T. 235, 3 / J. 21, 3)

Mittiu thanne noh ferro uuas, gisah inan sin fater, ... (T. 97, 4 / L. 15, 20)

And þā gýt þā hē wæs feorr his fæder, hē hyne geseah, ...

また、主語が動詞に先行する場合も含めて、斜格の人称代名詞が動詞より前に位置する

例は少なく、WS Gosp の主節の代名詞が動詞の相対的位置に影響を与えているのとは異なっている。

(b) 対格または与格の人称代名詞が用いられていない場合

(1)で述べた文頭に置かれる場合を除いて、人称代名詞以外の語（句）が動詞より前に位置する例は、Vulgata 等でも同じ語順であることが多い⁽⁸⁾。

3.2. 従属節の語順⁽⁹⁾

(1) 主語と動詞の位置関係

(a) Tatian の従属節では、主語が置かれる場合は、接続詞の直後に位置し、その後方に動詞が置かれることが多い。

Oba her thir ni hore, giholo mit thir noh thanna einan odo zuuene, ... (T. 98, 2 / Mt. 18, 16)

しかし WS Gosp と異なり、接続詞の直後に動詞が位置することもある。

Mit diu gientota ther heilant thisu uuort, vvuntarotun thio menigi ubar sina lera. (T. 43, 3 / Mt. 7, 28)

..., þā sē Hælend þās word geendode, þa wundrode þæt folc his lare.

(2) 動詞と、主語以外の文構成要素の位置関係

(a) 対格または与格の人称代名詞が用いられている場合

人称代名詞が動詞の後に置かれる例もあるが、多くの場合、人称代名詞は主語と動詞の間に置かれている。斜格の人称代名詞が動詞の前に置かれることの少ない主節とは大きく異なる点である。

Gitruobit uuas tho Petrus, uuanta her imo quad thrittun stunt: (T. 238, 3 / J. 21, 17)

..., thu uueist thaz ih thih minnon. (*ibid.*)

(b) 対格または与格の人称代名詞が用いられていない場合

従属節では、斜格の代名詞以外の語（句）も動詞より前に置かれていることがある。しかし、下の例のように動詞の前に置かれなことが、斜格の人称代名詞の場合に比較すると多い。

Mit thiu hér gisah thie menigi, steig ufán berg; ... (T. 22, 5 / Mt. 5, 1)

Mit thiu thie heilant quam in Petruses hús, gisah sina suigar ligenta inti

fiobar habenta. (T. 48, 1 / Mt. 8, 14)

4. WS Gosp と Tatian に見られる古英語・古高ドイツ語の語順変化の過程

第2節、第3節では WS Gosp および Tatian の語順の特徴を列挙した。もちろんこれらは、すべての文がそれに合致する例外のない規則と言えるものではない。しかし、節の種類、文構成要素の性質に応じて、構成要素間の配列について、ある程度の傾向が見られることは疑問の余地がない。WS Gosp と Tatian のそれぞれ主節と従属節の語順を相互に対比してみれば、次のようなことがわかる。

(1) WS Gosp と Tatian の間で、従属節においてはほぼ同じような語順の傾向を示している。従属節中に斜格の人称代名詞があれば、それを主語と動詞の間に置き、動詞後置の構文となっていることがきわめて多い。斜格の人称代名詞以外の語(句)があれば、それは主語と動詞の間に置かれる場合もあるし、動詞の後に置かれることもある。

ところで、WS Gosp, Tatian の語順を考察する際、人称代名詞が他の語句とは異なったふるまいをしていることに注目しなければならない。たとえば、WS Gosp では人称代名詞が他の語句とは異なり、動詞の前にとどまって動詞が前へ移行することに抗しているように見える。

代名詞のふるまいについては、Strang (1970: 313) が "weight" という概念を導入して説明しているように、代名詞は他の要素より「軽く」、前方に置かれると考えることができる。同様の説明は Denison (1993: 40) にも見られる。

It is generally agreed that pronouns tend to come earlier in a clause than functionally equivalent full NPs during the OE period, ...

これらの説明⁽¹⁰⁾は、代名詞と動詞以外の要素との比較であるので、動詞の位置との相対的關係を論じる場合十分とは言えない。しかし、代名詞が節の前方に置かれやすいという性質は、WS Gosp に見られる代名詞と他の語句との位置の相違と関連性が高いと考えられる。

(2) 従属節の場合と異なり、WS Gosp と Tatian の主節の語順は、かなり相違が大きい。WS Gosp と Tatian の主節の語順を、それぞれの従属節および他方の主節の語順と比べてみれば、次の特徴が見られる。

WS Gosp の主節は従属節と比較すれば、斜格の代名詞以外の語句が動詞の前に置かれることはまれで、代名詞も従属節に比較すれば動詞の前に置かれることは少なくなっている。

一方、Tatian の主節では、主語を除けば、代名詞も動詞より前に位置することは少ない。これは WS Gosp の主節と異なる点である。なお、主語が動詞より後方にある場合、その主語が代名詞でなければ、斜格の人称代名詞が主語に先行することが多い。これは、上に述べた代名詞の特質が古高ドイツ語にもあてはまるためであると考えられる。

WS Gosp の主節のもう一つの特徴は、特定の要素が文頭に置かれた場合には X V S (X) の語順となり、その他の要素が文頭に置かれている場合は X S V (X) の語順となる点である。否定辞 *ne* や副詞 *þā* が文頭に置かれる場合に前者の語順となる。この他の語、句および節が文頭に位置する場合は、通例後者の語順となるが、動詞が *bēon* のときに限り前者の語順も見られる⁽¹¹⁾。これに対して Tatian の主節では、文頭に置かれる語 (句) の種類にかかわらず、X V (X) の語順となることが多い。

ここまでの考察の結果明らかになった WS Gosp と Tatian の語順の特徴から、古英語、古高ドイツ語において次のような語順変化の過程を考えることができる。

WS Gosp と Tatian は、どちらの文献も主節においては、WS Gosp の代名詞の位置を除いて、現代語の語順、すなわち英語では S V X、ドイツ語では定形第 2 位により近い語順を示している。つまり、古いゲルマン語の基本語順として動詞後置を仮定すると、WS Gosp および Tatian では、主節においてドイツ語、英語とも動詞が前方に推移し、それぞれの現代語の語順へと向かう移行期の状態を見ることができるのである。そして、古英語の主節における代名詞の位置の特殊性は、より古い語順を示していると考えられる。代名詞に固有の相対的に前方に置かれるという性質が、古い S X V の語順と一致し、動詞の前に残り、古い語順を維持しているのである。

主節において動詞が前方へ推移する点では、ドイツ語と英語は同じ傾向を示しているが、ドイツ語と英語で異なるのは、ドイツ語の動詞は必ずしも主語とは限らない文頭要素の近くに置かれる傾向が見られ、主語の位置は動詞の位置を決める要素とはならないのに対して、英語の動詞は、文頭に近い位置に置かれる主語に接近する傾向が見られる点である。

従属節の語順については、WS Gosp では、主節と同じような変化の過程を見ることができるが、主節よりも進行が遅れている様子が窺える。

Tatian の従属節については、WS Gosp の従属節と類似した語順を示している。つまり、Tatian の代名詞は、主節では動詞の相対的な位置に影響は与えていないのに対し、従属節においては、他の語句とは異なり、動詞の前に位置することが多い。しかし、現代ドイツ語の従属節の語順は定形後置であるので、WS Gosp の場合のように、Tatian の従属節の語順を S V X への移行過程と見ることができない。このことについては、二つの可能性を指摘しておきたい。

一つは、Tatian の語順には原典の制約が厳しくはたらいいて、代名詞のみが比較的

自由に固有の語順を示しているという可能性である。Tatian では従属節においてのみ代名詞が動詞の前に置かれている例が多いので、従属節では古いゲルマン語の語順が変化を受けずに保たれているとみなすことができる。

もう一つは、ドイツ語における従属節の発達と関連する。古いゲルマン語では文と文の接合方法は接続詞なしの主節の並置であったと考えられる (Tschirch 1966: 175)。また、古いドイツ語に従属接続詞や関係節がまったく存在しなかったとは考えられないが、古高ドイツ語では並列文が好んで用いられていることも事実である (Ebert 1978: 21)。ドイツ語では、従属文が十分な発達を遂げる前、すなわち主節相互の接合が主流であった時に、すでに主節において、動詞後置から動詞が前方に向かう語順の推移が進行しており、他方で従属節の形成もそれに並行して進行していた (たとえば主節の文構成要素であった指示代名詞が、従属節の文構成要素となり、関係節が成立する) と考えることができる。主節では動詞が前方に移るが、英語の場合に見られるように、代名詞が動詞より後ろに置かれるようになるのは他の語句に比べて遅れる。その結果、代名詞が完全に動詞に後置されるようになる前に従属節が成立し、動詞が代名詞よりも前方に推移する変化は主節においてのみ進行し、従属節ではそれ以上進まなかったということが考えられる。あるいは、従属節が成立する前に、代名詞の特殊性の影響もすべて排した主節の語順が確立し、従属節の成立とともに従属節において新たに動詞後置へと向かう語順の変化が生じ、代名詞の持つ相対的に前方に位置する性質により、他の語句よりも容易に動詞の前に置かれたという可能性も考えられる。

いずれにしても、主節と従属節において語順の分化が生じていることには変わりなく、その要因を明らかにするには、従属節成立の過程との関連を考察する必要があると思われる。

注

- (1) 特定要素の強調のための倒置等、修辭的効果を得るための要素の配置の変更を伴わない語順を「基本語順」と称し、これを本稿の考察の対象とする。
- (2) ドイツ語を考察の対象とするとき、通例「主文」「副文」という用語を用いるが、本稿では英語について言及する場合もドイツ語について言及する場合も「主節」「従属節」という用語を用いる。
- (3) WS Gosp は1000年頃、Tatian は830年頃の成立とみなされている。
- (4) WS Gosp の原典は Vulgata と考えられる (Bright (1904): ヨハネによる福音書のテキストの解説 xxvi 参照)。Tatian の原典は特定できないが、この時代の聖書翻訳には、Vulgata の影響は無視できない。

- (5) Vulgata では, "haec dixit in synagoga ..." となっている。
- (6) 代名詞を clitic とする考え方もある (加藤 1989: 151 参照) が, WS Gosp では X V S X の語順の場合この例のように代名詞も他の語 (句) と同様に S より後方に置かれることも多い。
- (7) bithiu, for ðām とも従属接続詞としての用法もあるが, ここではラテン語 (Vulgata) propterea の訳語として用いられており, 副詞である。
- (8) ここで見たように, Tatian の主節では動詞後置は少ないことがわかる。Lippert (1974) には, Tatian の主節において定動詞が第 3 位より後ろに置かれることは少ないということが示されている。
- (9) 本稿の用例には, 従属接続詞に導かれた従属節のみ挙げたが, WS Gosp においても Tatian においても, 関係節の語順は他の従属節の語順の傾向と大きな相違は見られない。Tatian の関係節については拙稿 (1993) 参照。
- (10) また, Behaghel の指摘する語順の原則にも矛盾しない。
- Ein zweites machtvolles Gesetz verlangt, daß das Wichtigere später steht als das Unwichtige, ... (Behaghel 1932: 4)
- (11) この動詞の特殊性については, Robinson (1992: 165) および手嶋 (1981) 参照。

使用テキスト

- The Gospel of Saint Matthew in West-Saxon.
- The Gospel of Saint Mark in West-Saxon.
- The Gospel of Saint Luke in West-Saxon.
- The Gospel of Saint John in West-Saxon. edited by James Wilson Bright . Repr. 1972 (AMS Press, New York 1904)
- Tatian. Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar. Hg. von Eduard Sievers. Zweite neubearbeitete Ausgabe. Unveränderter Nachdruck. 1966 (Ferdinand Schöningh, Paderborn)
- Biblia Sacra Vulgata II. Dritte, verbesserte Auflage. Unveränderter Nachdruck. 1983 (Deutsche Bibelgesellschaft 1969)

参考文献

- Behaghel, Otto. (1932): *Deutsche Syntax*. Band IV. (Carl Winter, Heidelberg)
- Curme, George O. (1922): *A Grammar of the German Language*. 2nd. revised edition. (11th. Printing, 1977. Frederick Ungar, New York)

- Denison, David (1993): *English Historical Syntax*. (Longman, London and New York)
- Ebert, Robert Peter (1978): *Historische Syntax des Deutschen*. (Metzler, Stuttgart)
- Lippert, Jörg (1974): *Zu Technik und Syntax althochdeutscher Übersetzungen*. (Wilhelm Fink, München)
- Lockwood, W. B. (1968): *Historical German Syntax*. (Oxford)
- Mitchell, Bruce (1985): *Old English Syntax II*. (Repr., 1987. Clarendon Press, Oxford)
- Robinson, Orrin W. (1992): *Old English and its Closest Relatives: A Survey of the Earliest Germanic Languages*. (Stanford University Press, Stanford)
- Smith, Jesse Robert (1970): *Word Order in the Older Germanic Dialects*. (UMI)
- Strang, Barbara M. H. (1970): *A History of English*. (Methuen, London)
- Tschirch, Fritz (1983): *Geschichte der deutschen Sprache*. Erster Teil. 3., durchgesehene Aufl. (Erich Schmidt, Berlin)

池田光則 (1993) : 「古高ドイツ語 Tatian における関係文について」(『東北大学言語学論集』第2号, 東北大学言語学研究会)

小野 茂・中尾俊夫 (1980) : 『英語学大系8 英語史I』(大修館書店)

加藤鉦三 (1989) : 「古英語語順の不自由性」(『人文科学論集』第23号, 信州大学人文学部)

手嶋竹司 (1981) : 「古代ゲルマン語の Wortstellung に関する一考察」(『人文科学論集』第15号, 信州大学人文学部)

(山形大学講師)